

(一)

今はむかしの戦争前のはなし。

日本が暗い方向へ歩き出していた頃、全国の文学にかかわる者達の上にも、次第に緊めつけの力は及んで来て、「文学報国会」という名のもとに各団体は一まとめにさせられてゆき、当然、女達の「女流文学者会」も、そこからはずれるわけにはいかなかった。

とはいえ、元来個人個性の上に立ってものを書く人間たち、そうひといきに「気ヲ付ケ」の「右へナラへ」とは行きにくい。初期の頃は、「報国会」の委員長が久米正雄。「女流」の方の委員長が吉屋信子、という顔触れではあるし、各ジャンルが集って交流すれば、親睦会に似た空気も無いではなかった。

俳句部門には、長谷川かな女、星野立子、中村汀女をピークに広い裾野がある。

短歌部門は、今井邦子、四賀光子、若山喜志子、阿部静枝、他。

詩部門には、永瀬清子、江間章子、他。

小説部門は賑やかに、林芙美子、宇野千代、

網野菊、円地文子、中里恒子、芝木好子、窪川（佐多）稲子、太田洋子、他。

随筆部門、壺井栄、村岡花子、他。

脚本部門、森三千代、水木洋子（映画）。

翻訳部門、長岡輝子。ざつと並べても、当時の百花繚乱。下っ端のわたくしが、常任委員という連絡役をして、ほんの短い間ながら

それぞれの人への思い出も残っている。

(二)

非常時の服装、防空服という呼び方の着物が女達の問題になり始めた。洋服に慣れた者は当然ズボン考えたが、和服の女達には、

二本の足を別々の袋に入れることは始めての出来ごとであった。現代のように、老年でもジョギング、ゲートボールという時代ではない。五十年以上前の日本のこと。

もんべ、かるさん、たっつけ、馬乗袴、など地域によって違う仕事着の呼び名や仕立方が紹介される。まちの入れ方など多少の違いがあり、大きいまちを入れれば着物の裾がつり上らないので温かいけれども、股下が短くなり、スマートでない。胴長短足のロシアサーカスの熊の歩きに似てしまう。ああでもない。こうでもない——。

第一に布地が無かった。都会の女達の木綿物は浴衣だけ。白地の花模様ではそれも使えない。ふだん着の銘仙で仕立てても薄地のため頼りない。お召、縮緬類は濡れればひとちみで実用にならない。「とにかく間に合えばいいじゃないの」と誰かが言えば、「とんでもない。命をあずける防護服、ひよっとすれば死衣装だ。」

(三)

世間では手に入らない布地でも、有る所には有るらしい。委員は女流会員のために努力してほしい。と言われて、陳情に行くことに

# 風歌のあゝる 風景

③

齋藤 史

## 戦前の女流文学者たち

なった。目的の場所は陸軍省。軍は物資を握っているというが、真偽は誰も知らないし、行った事もない所。

委員長、副委員長、常任委員など、いっばしに並べてみても、いつもの顔触れである。この日のいでたち、吉屋と齋藤はスーツ（言うならば敵性の衣服である）、他は着物。中でも宇野は薄紫の半羽織をさらりと着こなしたよそおい。万事くすんで、和服は袖丈を切り詰め、もんべ姿もぼつぼつ混じる電車の中に一団となって乗りこんだから、車内の眼が全部こちらに向いてしまった。しかも見ない様なふりをしながら、見る。

私達にすれば、特別異様な風体というわけ

ではなし「こんな服しかありませんので、是非とも防空服をつくりたく」と切り出す見本にはなるかもしれない、と多少の思わくもあるのに、何と見られようとも平気な顔をしつづけた。

#### 四

同じ形の窓が整然と並んだ角張った建物の、衛兵所の前を通って、しぜんと一同大真面目な顔つきになっていた。何しろあたりの空気が、世間一般とは違う「陸軍省」なのだ。

連絡はしてあるので、すぐに通された部屋は、清潔の見本のように清潔。無駄は何一つもなく、テーブルも椅子も四角。色彩もない男社会。軍人さんは礼儀正しく、お辞儀も直線的。こちらもせいぜい背骨を伸ばして腰掛けた。

代表で話すのは吉屋信子である。この人、見たところは髪も短かく服も地味でボーイッシュなのだが、声はやや高めで少女の如く甘く、可愛らしく、非常に女性なのである。

「あのう、あたくし達はねえ」と始めたが、これが何ともあたりとマッチしない。相手は「ハッ」という。

「それはねえ、防空服を作りたいということだね」「ハッ」

「その材料の布なんですけど」「ハッ」

先方も柔かく付合ってくださいとうとするらしいのだが、トーンがあまりにも違いすぎる。末席に居るだけの私、両者を見ているうちに、無責任なようだが、おかしさがお腹の底からこみ上げて来た。（場違い）を絵に描いたような具合なのだ。

陳情は結局「趣旨は相解った。しかし会員全部は到底無理である。が、一応保管倉庫を調べて御返事を申上げる」というようなことになり、「よろしく御願います」と揃って頭を下げて引上げた。

子供の使いのようだという気もしたが、誰もさほどうまくゆくと期待していたわけでもなかった、と、門を出てから各々の顔を見て思った。

このあたりはまだよかった。以後、加速度に姿勢は下降していったのである。

先にあげた女流文学者の名の、おおかたの人はすでに亡い。

老いて抱く思ひの上によみがへる先逝  
き人のおもかげいくつ

（さいとう・ふみ 「原型」主宰）

※このコーナーでは、齋藤史氏のエッセイと前登志夫氏のエッセイを交互に連載いたします。